【ねがいましては】

平成２９年１２月２２日　　*KYOWA SCHOOL*
第３２６号

「２００メートルの出会い」

灰谷健次郎さんの著書、「灰谷健次郎の発言〈3〉子どもが生きる」より、以下のような場面がありました。

ある身体障害者の少女が毎朝施設へ向かうスクールバス停留所までの距離２００メートルの出会いです。

彼女はその２００メートルに数十分かかります。

まずモーニングサービスの看板をかけてくれるおねえさんとあいさつをします。

「麻理ちゃん。おはよう。」「靖子ねえちゃん。おはよう。」

言語障害を併せ持っている彼女のことばは「あーあー」としか聞こえません。

途中、まず一回目の休みを取ります。仕出し屋さんの前でとります。ネコのクロにもあいさつをします。

二回目の休みをかん木のはえた野っ原でとります。そこで彼女はハチが体内から余分な水分を口から出すのをじっと見ます。少女はしあわせな気分になり、ふたたび歩き出します。パン屋の前を通ると、今、ジャムパンを焼いているのか、あんパンを焼いているのかを当てます。パン職人から「オッス、麻理ちゃん」と声をかけられます。

おしまいの休みは草花の植えてある前でとります。マツバボタンとあいさつをするのです。マツバボタンは一つのおしべを右からさわると、残りのおしべがみんな右へならう習性があります。彼女は誰に教わったわけでなくそれを知っているのです。それを朝のあいさつと言っています。

彼女がバス停へ着くころ、彼女の前を、朝食を抜いたサラリーマンが、ネクタイの乱れをなおしながらかけていきます。幼稚園に行きたがらない子どもが泣きながら、親に手を引かれていきます。

そしてその旁らをある大人が次のような言葉を吐きながら通り過ぎます。

「あんな子、なにが楽しみで生きてるのやろ」

私はこの一行を目にしたとき、こころが凍りつきました。

この子はしあわせを見つけながら、しあわせに出会いながら生きている。ハチが口から水を吐き出すのを私は知りませんでした。マツバボタンがそんな習性を持っていることを知りませんでした。

誰もが陥ってしまうひとつの感情、障害を持った子に出会ったとき・・・気の毒な子だな・・・その感情は全く必要がないこと、それどころかひょっとしたらこの子の方が私たち健常者よりもしあわせなのかもしれない。

彼女は彼女としての人生を送っている。彼女は彼女だけのしあわせの感じ方を持っている。それどころか、健常者たちは日々の競争社会の中にずっぽりと足を踏み入れてしまっている中で、鬱々とした気持ちを味わいながら生活しているかもしれない。打ちのめされ、苦しみ、裏切られ、信頼という言葉から見放され、どう生きていったらいいのかさまよい歩いている。

この子の周りには明るいあたたかいお日様が毎日見守っていてくれている。「しあわせ」をこころからかみしめ味わっている。そんな感情に襲われました。

この子にそそがれるあたたかい日差し・・・それは家庭の中でも創れるはずです。日々、多くの苦しみや哀しみにさらされながら帰ってくる我が子に向け、投げかけてあげられるもの・・・。それは何なのか。吸収してあげられるもの・・・それは何なのか。生きることとは何なのかへの原点に今、立ち戻ることが必要なのかもしれません。

家族があるひとつの大切な、かけがえのない宝物を持ち続けること、それが新しい年への希望につながればと思います。

家族全員が「信頼」でつながれること。そうであれば家族のひとりがきっと誰もが悪いと思うことをしてしまったときでも、家族はそのわけを聞き入れてくれるだろうし、理解してくれるはずです。家族全員が「おもいやり」でつながれるなら、自然とお手伝いができたり、自分のことを自分で行うことができるようになるでしょう。家族全員が「しあわせ」でつながれるようになったとき、きっと外でイヤなことがあっても、家族に会えば気持ちは癒えると安心するでしょう。そんな祈りをささげること。それが新年へのひとつ目の祈りとなれば幸いです。

新しい年が来て、どうか足もとの小さな花に目を向けてください。精一杯に咲いているその姿に「ありがとう」の一言を・・・。暖かい部屋に迷い込んできた一匹のクモに、「君、ひとりで寂しくないかい、友だちはいないのかい。ぼくで良ければいつでも相談に乗るからね。」と、声をかけてあげてください。

学校が始まり、子どもたちはまたいつもの競争の中へと入っていきます。それを競争と思わずに、助け合いだと思いながら生活できるようになったらいいですね。きょうはどんなことで助けてあげられるだろうか・・・。きょうはどんなことで目の前の人の心を和らげることができるだろうか。それが原因で自分が損したっていい。だって君には世界で一番の応援部隊がいるのだから。

家族がいるのだから。